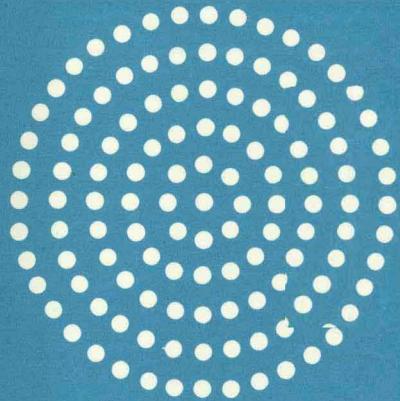


世界の詩集 15

エリオット詩集



上田 保訳

訳者 上田 保

1906年に山口県で生まれる。1929年に慶應義塾大学英文科を卒業。イギリス、アメリカを主としてヨーロッパ現代詩に親しむ。慶大名誉教授。

〔主要著書〕『概説世界文学』(創元社),
『ヨーロッパ文学入門』(慶應通信),『現代
文譜』(宝文館), ロレンス
「生きぬいてきた!」(國
「文学の読み方』(宝文



世界の詩集

15 エリオット詩集

発行所 角川書店
訳者 上田 保

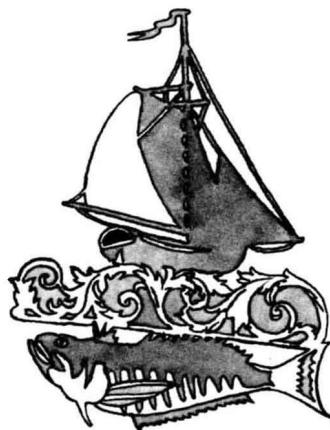
東京都千代田区富士見二丁目十三
番一〇二号
電話 東京三一九五二〇八
東京三六五二七三(大代表)

写植
株式会社
製版 植竹プロセス製版株式会社
印刷 曜美術印刷器株式会社
製函 三真堂印刷紙器株式会社
製本 会社 錦木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0398-590315-0946(3)

目
次



フルーフロックとその他の観察

アルフレッド・フルーフロックの恋歌

婦人の肖像

前奏曲集

風の夜の狂詩曲

窓のそばの朝

ボストン・イーヴニング・トランスク

リフト

ヘレンおばさん

アホリナックスさん

氣どつた会話

なげく少女

詩集

ゲロンチヨン

ベデカラをもつたバー・バンクと葉巻を

くわえたブライ・シャーティン

まつすぐに立つたスウェイ・ニイ

料理用の卵

河馬

不死のささやき

七 六 五 四 三 二 一 空 空 空 空 空 空 空 空 空

エリオット氏の日曜日の朝のお勤め
ナイチンゲールにかこまれたスウェイ
ニイ

荒地

I

死者をはうむる

II

将棋あそび

III

火の説教

IV

水死

V 雷神の言葉

うつろな人間たち

聖灰水曜日

エアリアル詩集

東方の博士がした旅

シメオンの歌

空 空 空 空 空 空 空 空 空

未完成の詩

一九

【始】の合唱

一四

合唱 I
合唱 II

二三

合唱 III
合唱 VII

二四

合唱 VIII
合唱 X

二五

合唱 IX
合唱 XI

二六

合唱 XII
合唱 XIII

二七

合唱 XIV
合唱 XV

二八

合唱 XVI
合唱 XVII

二九

合唱 XVIII
合唱 XIX

三〇

合唱 XX
合唱 XXI

三一

合唱 XXII
合唱 XXIII

三二

合唱 XXIV
合唱 XXV

三三

合唱 XXVI
合唱 XXVII

三四

合唱 XXVIII
合唱 XXIX

三五

合唱 XXX
合唱 XXXI

三六

合唱 XXXII
合唱 XXXIII

三七

合唱 XXXIV
合唱 XXXV

三八

合唱 XXXVI
合唱 XXXVII

三九

合唱 XXXVIII
合唱 XXXIX

四〇

合唱 XL
合唱 XLI

四一

合唱 XLII
合唱 XLIII

四二

合唱 XLIV
合唱 XLV

四三

合唱 XLVI
合唱 XLVII

四四

合唱 XLVIII
合唱 XLIX

四五

合唱 L
合唱 LI

四五

合唱 LII
合唱 LIII

四六

合唱 LIV
合唱 LV

四七

合唱 LVII
合唱 LVIII

四八

合唱 LVIII
合唱 LX

四九

合唱 LXI
合唱 LXII

五〇

合唱 LXIII
合唱 LXIV

五一

合唱 LXV
合唱 LXVI

五二

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

五三

合唱 LXIX
合唱 LXX

五四

合唱 LXXI
合唱 LXII

五五

合唱 LXIII
合唱 LXIV

五六

合唱 LXV
合唱 LXVI

五七

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

五八

合唱 LXIX
合唱 LXX

五九

合唱 LXXI
合唱 LXII

六〇

合唱 LXIII
合唱 LXIV

六一

合唱 LXV
合唱 LXVI

六二

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

六三

合唱 LXIX
合唱 LXX

六四

合唱 LXXI
合唱 LXII

六五

合唱 LXIII
合唱 LXIV

六六

合唱 LXV
合唱 LXVI

六七

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

六八

合唱 LXIX
合唱 LXX

六九

合唱 LXXI
合唱 LXII

七〇

合唱 LXIII
合唱 LXIV

七一

合唱 LXV
合唱 LXVI

七二

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

七三

合唱 LXIX
合唱 LXX

七四

合唱 LXXI
合唱 LXII

七五

合唱 LXIII
合唱 LXIV

七六

合唱 LXV
合唱 LXVI

七七

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

七八

合唱 LXIX
合唱 LXX

七九

合唱 LXXI
合唱 LXII

八〇

合唱 LXIII
合唱 LXIV

八一

合唱 LXV
合唱 LXVI

八二

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

八三

合唱 LXIX
合唱 LXX

八四

合唱 LXXI
合唱 LXII

八五

合唱 LXIII
合唱 LXIV

八六

合唱 LXV
合唱 LXVI

八七

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

八八

合唱 LXIX
合唱 LXX

八九

合唱 LXXI
合唱 LXII

九〇

合唱 LXIII
合唱 LXIV

九一

合唱 LXV
合唱 LXVI

九二

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

九三

合唱 LXIX
合唱 LXX

九四

合唱 LXXI
合唱 LXII

九五

合唱 LXIII
合唱 LXIV

九六

合唱 LXV
合唱 LXVI

九七

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

九八

合唱 LXIX
合唱 LXX

九九

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇〇

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇一

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇二

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇三

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇四

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇五

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇六

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇七

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇八

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇九

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇一〇

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇一一

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇一二

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇一二

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇一三

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇一四

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇一五

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇一六

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇一七

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇一八

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇一九

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇二〇

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇二一

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇二二

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇二三

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇二四

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇二五

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇二六

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇二七

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇二八

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇二九

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇三〇

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇三一

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇三二

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇三三

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇三四

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇三五

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇三六

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇三七

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇三八

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇三九

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇四〇

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇四一

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇四二

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇四三

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇四四

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇四五

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇四六

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇四七

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇四八

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇四九

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇五〇

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇五一

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇五二

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇五三

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇五四

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇五五

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇五六

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇五七

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇五八

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇五九

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇六〇

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇六一

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇六二

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇六三

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇六四

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇六五

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇六六

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇六七

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇六八

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇六九

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇七〇

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇七一

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇七二

合唱 LXIX
合唱 LXX

一〇七三

合唱 LXXI
合唱 LXII

一〇七四

合唱 LXIII
合唱 LXIV

一〇七五

合唱 LXV
合唱 LXVI

一〇七六

合唱 LXVII
合唱 LXVIII

一〇七七

合唱



エリオット詩集

ブルーフロックとその他の観察

アルフレッド・ブルーフロックの恋歌

われもし、わが答えの、ふたたび
世に帰りゆく人に聞かるるものと思わば、

この焰は静まりて、また、
ゆらぐことなからん。されど、

わが聞くところ真ならば、この深みより生きてかえりしものなきゆえに、
われは名を汚すおそれなしに答うるなり。

さあ、いつしょに出かけよう、君と僕と、
手術台で麻酔マツエイにかけられた患者のように

夕暮が空いちめんに広がるとき、
人通りのまばらな街をとおつて、いつしょに出かけよう、
ひと晩どまりの安ホテルに流れこんで、
眠られぬ夜にもらすささやきや、

カキ殻のちらばつたオガ屑の料理屋。

悪意にみちた

ながい議論のようにつづいて

逃げばのない疑問にひきずりこむ街……

おお、「それはなんだ」なんて、きかないでくれ。

いっしょに出かけて訪問しよう。

部屋のなかでは、女たちが行ったり来たりして
ミケランジェロのことをしゃべっている。

窓ガラスで背中をこする黄いろい霧は

窓ガラスで鼻づらをこする黄いろい煙は

あちこちの夕暮のすみで舌なめずりをし、

下水によどむ水溜りで思案し、

煙突からおちるススを背中にうけ

露台をすべって、いきなり飛びおりたが、

おだやかな十月の夜だとわかると、

家のまわりで、ひと渴まして眠ねむてしまつた。

窓ガラスで背中をこすつてから

ゆつくり街を流れる黄いろい煙には、
なるほど、暇があるのだ。

暇が、君の会う顔に会うため
顔をつくる暇があるのだ。

人殺しをする暇も、産みだす暇も、

毎日あらゆる仕事をてがける手が、
疑問を持ちあげ、君の皿のうえにおとす暇、

トーストを食べ、茶をのむまえに、

君にも僕にも暇がある、

まだ、百度も決断をしぶり、

見てから、百度も見なおす暇がある。

部屋のなかでは、女たちが行つたり来たりして
ミケランジェロのことをしゃべっている。

たしかに、まだ「思いきって、やつてみようか」
「ひとおもいに」と、考えなおす暇がある。

振りむいて、頭のまんなかに
禿^{かぶ}をみせながら、階段をおりる暇がある。

「あの人のかみ毛は、すっかりうすくなりましたわ」と彼女らはいうだろう。

おれのモーニング・コート、おれのカラーは、ぐつとアゴをしめつけ

おれのネクタイは、はでで上品で、一本のヒンでひきたつていてる。

「だって、あの人手足は、なんて、やせてるんでしよう」と彼女らはいうだろう。
思いきつて、おれに

宇宙がかきみだせるか。

この一分間に、一分間であべこべになる
見なおしと決断の余地がある。

それというのも、おれはもうすっかり知っているのだ、みんなすっかり知りつくし
たのだ。

朝も夕暮も午後も知つていて、

おれはコーヒーのサジで、おれの一生を計つてしまつた。

おれは、むこうの部屋からひびく音楽にかけられて、

息もたえだえに消えてゆく声を知つていてる。

それなのに、今さら、どうしてやれよう。

しかも、おれはもう、あの眼を知つていて、みんなすっかり知つていてる――

君たちを公式的なきまり文句にはめこむ眼、

そして、おれが公式的なきまり文句で、腹ばいに、ピンで刺されたとき、
ピンで壁に刺されて、もがきまわるとき、

いつたい、どうして、おれの日頃のやり方の一部しじゅうが吐きだせるか、
それなのに、今さら、どうしてやれようか。

しかも、おれはもうあの腕を知っている、みんなすっかり知っている——
腕輪をはめた、あらわな白い腕

(だが、ランプの光でみると、うす茶いろのわた毛がはえている！)
おれの氣持をこんなにかきみだすのは、

着物からたちのぼる香水のにおいなのか。

ショールを巻きつけ、テーブルの上にながくのびた腕

さてひと思いにやってみようか。

どうきりだしたらよいのか。

* * * *

たそがれどき、せまい街をとおつて、

ワイシャツだけで、窓からりだした淋しい男たちの
バイフからたちのぼる煙を見ましたとでもいおうか。

いっそ、二枚のカニ鉄はさみになつて

静かな海の底をこぎざみに走つたほうがましだ。

そして午後も、夕方も、ほんとに安らかに眠つている！

ながい指に愛撫されて

ぐつすり……疲れて……いや、仮病けびょうかもしだぬ、
ゆかの上にねそべって、君と僕のすぐそばで。

お茶やお菓子やクリームをたべたあとで、いつたい、おれに、
その場を大詰へもつてゆくだけの力があるのか。

とにかく、おれは泣いて断食し、泣いて祈ったが、

おれは、すこじ禿げあがつたおれの頭が大皿にのせられて、持つてこられるのを見
たが、

おれは預言者ではない——もつとも、それは大したことではない。

おれは、おれの偉大な瞬間がゆらめくのを見たし、

また、永遠の『従卒』がおれの上衣をもつて、にやにや笑っているのを見た、
要するに、おれはこわかったのだ。

酒やマーマレードやお茶のあとで、

磁器のたぐいにかこまれて、君や僕のぐわさのあとで、
つまり、それだけの値うちがあつただろうか。

微笑をうかべて事件をひと思いにのみこみ、

宇宙をボールにまるめて

あの逃げばのない疑問のほうへころがしこみ、

「わたしは、死者のなかからよみがえり、あなたに

すっかり話すために、もどつて来たラザロです、さあ、話しましょう」というだけの値うちが――

もし相手の女が、頭のそばに枕をおいて、

「わたし、そんなつもりはありませんわ、ほんとに、ちがいますわ」とでもいうとしたら。

いつたい、それだけの値うちがあつただろうか、わざわざやるだけの値うちがあつただろうか。

日暮れや、まえ庭や、水をうつた通りのあとで、

小説や、紅茶茶ワンや、ゆかをなびくスカートや、その他さまざまのあとで。

おれの気持をすばり言いあてることなんかできないのだ！

まるで、幻灯が、いろいろな型に、神経を写しだしているようなものだ。いったい、それほどの値うちがあつただろうか、

もし相手が枕をおき、すっとショールをとつて、

窓のほうをむき、「ほんとに、ちがいますわ、

わたし、そんなつもりじゃありませんわ」とでもいうとしたら。

* * * * *

いや、おれはハムレット王子ではない、また、そう生れついてもない。お附きの貴族にすぎないので、すじの進展、

場面の工夫に一役かって、王子に進言する従臣。

まったく、手がるな道具、

うやうやしく、役にたてば喜び、

術策にたけ、用心ぶかく、小心よくよく、

大言壯語のわりには、ちょっと頭のめぐりがにぶい、
ときには、まったく物笑いの種になり、

ときには、ほとんど『道化もの』。

おれは年をとつて、ふけてきた
ズボンのすそをまくつて着よう。

うしろで髪をわけようか、桃を食つてみようか。

白いフランネルのズボンをはいて、海岸を歩いてみよう。

おれは人魚がたがいに歌いあうのをきいた。

人魚たちは、おれに、歌いかけているのではあるまい。

風が、海のうえを、白く黒く吹きわたるとき、おれは
人魚たちが、なびく波の白髪をくしけずりながら、
波にのつて、沖の方へゆくのを見た。